

<ラウンドテーブル報告3>

多様な学生に対応する必修科目の在り方と教育プログラム

【企画者】奥田雅信（大手前大学）

【司会者】福井愛美（大手前大学）

【報告者】奥田雅信（大手前大学） 本田直也（大手前大学）

石毛 弓（大手前大学） 山下真知子（大手前大学）

1. はじめに

大学はユニバーサル化の時代を本格的に迎え、多様な学生を受け入れつつも教育の質を維持し向上させるシステム作りがこれまでになく重要になっている。

特に、全学生を対象として学びの基盤を形成する初年次必修科目においては、教育の質保証に向けて、学生の多様化への対応、カリキュラム・教材、教員、組織連携等に、大学全体で取り組まねばならない。

本ラウンドテーブルでは、大手前大学における初年次必修科目の教育プログラムを紹介し、上記の問題をいかに解決するか議論した。

2. 大手前大学の初年次必修科目

リベラルアーツ型教育を掲げる大手前大学の初年次教育には、学びの根幹となるベーシック必修4科目（「フレッシュマンセミナー」「日本語表現」「英語表現」「情報活用」）が設置されている。

ラウンドテーブル第1部では、多様な学生全てを自己教育へ導くために4科目が連携して構築したシステムの紹介と実践報告を行った。以下では要点のみ述べる。詳しくは浦畑ほか(2009)、奥田ほか(2008)を参照されたい。

(1) ターム制

5週間で1つのまとまりを学習する「1学期3ターム制」を導入し、ターム単位で「学習（1～3週目）→診断・評価（4週目）→発展学習・補充学習（5週目）」の学習サイクルを確立し、学習内容の確実な習得を図る。

(2) 到達目標別コース編成

「到達目標別コース編成」を実施し、目標達成に向けて一人一人の可能性の範囲で最も高いレベルの自己教育力の育成を目指す。

春学期第1タームに学力・意欲によらない一律のクラスで基礎学力の習熟度を自己診断した後、学生自ら選択したコースにおいて学習を進めていく。ターム毎にコース変更も可能なシステムをとる。

(3) スタンプ制

学生個々の学習状況・成果を可視化するために「スタンプ制」をとる。毎回の出席、課題取り組み状況は、独自開発した携帯電話対応型LMS「確認くん」に「○」「×」で表示される。スタンプを全て「○」にすることが単位修得のための最低要件となる。

(4) 教育・学習支援

学習支援センターに採点専門スタッフの「マーカー」を配置し、全クラスの課題・小テストを同一基準で採点する。また、個々の学生の状況を踏まえて、チューターが学習アドバイスを行う。未習得部分のある学生をフォローし、学力・意欲の高い学生には課外に特別学習の機会を提供する。

(5) 成果

学生の出席率が劇的に改善したほか、「ターム制」「到達目標別コース」「確認くん」について、9割以上の学生が高い満足度を示した。さらに、学期末に全学生が受験する外部検定試験にも成果は確実に表れている。

3. 質的転換をはかるための課題

ラウンドテーブル第2部では、多様な学生

全てに対応した教育プログラムの在り方について参加者全員で議論した。以下では、質的転換をはかるための4つの課題とその解決への一助として本学の取り組みについて述べる。

(1) カリキュラム, 教材

カリキュラムは、統一的で組織的な教育目標に向かって、科目間連携のもと厳密に組み立てる必要があるが、教員の専門性・自立性に阻まれ進展しないなどの難しさがある。

本学では、教員に依存する教育ではなく、誰がその科目を担当しても、何をどこまで教えるのかがわかる組織的な教育を行うことを意識している。科目毎にコーディネーターを配置し、シラバスから教材、課題までを作成し、カリキュラム管理を行っている。

(2) 教員

経験・能力・世代差など、教員にかかわる問題は多いが、何よりも、授業を「教員任せ」にしないことが重要である。

本学では、毎回の授業前後に、担当教員全員でショートFDを実施している。日々の授業が全体的な目標の実現に向けてどう動いているのかの進捗管理を行って、教員を教室内で孤立させないための仕組みである。

全体目標を明確化し、全教員の共同戦線で臨むことが教育の質向上のためには欠かせないが、そのためには、教室内の情報を公開して、教員を十全にサポートする体制を構築することが大切である。

(3) 組織

日常的な教育活動をどのように組織化するかという問題とつながることとして、どこまでが授業担当教員の仕事で、どこからが大学の組織的な取り組みが必要になる課題なのかの線引きを行うことが重要である。

本学では、例えば、潜在的に長期欠席・退学へと至る可能性もある欠席者、課題不合格者、課題未提出者などを毎回の授業データで把握し、全科目で指標化することで、関連部署と連携し、組織的な支援体制をとる。

(4) 学生

多様な学生に対していかに個に応じた指導を行うかは、教員の個人的な努力でどうかなる問題ではなく、組織的に取り組むべき問題である。

本学では、毎回の授業ポイントが明確に示された教材や、毎回の授業目標が達成されているかどうかの学生情報をくみ取るための課題を、全学的に統一した形でコーディネーターが作成している。課題の点数、「スタンプ」の推移は、学期の到達目標に向かって、教員が次回の授業で何をすればいいのか、どんな指示を学生にすればいいのかを判断するための資料として、全教員で共有している。

また、「ターム制」「到達目標別コース」により、学習スピード、学習課題の多様化に対応できるカリキュラム構成になっている。

学生の自己管理も重要となるが、学生の現状と毎回の授業目標とのズレをたえず喚起するような仕掛けとして「スタンプ制」や「確認くん」を開発・導入している。

4. おわりに

大学の入口段階の初年次必修科目において個々の教員、授業にブレがあるということは、大学としての教育目標を持っていないということに等しい。本ラウンドテーブルで再確認されたのは、初年次必修科目の場合だけでなく、教育課程全体で、大学としての目標を全教員が絶えず意識しながら、日々の授業努力を重ねる組織的な取り組みなしに、教育の質を高めることはできないということである。

参考文献

浦畑育生ほか(2009),「学士課程教育の改革へのアプローチをどのように進めるかーリベラルアーツ教育への転換と試行(第一報)ー」,『大学教育学会誌』,31(1),22-28.

奥田雅信ほか(2008),「多様な学生に対応する必修科目の在り方と教育プログラム」,『初年次教育学会第1回年次大会発表要旨集』,22-23.